

郭沫若作
須田禎一譯

虎符

—信陵君と如姬—

てすびす叢書

• Thespis Series •

未 來

虎 符

1953 年 6 月 25 日 第 1 刷印刷

1953 年 6 月 30 日 第 1 刷發行

定價 170.00

譯者との
了解で檢
印を廢す

譯 者 須 田 禎 一

編集者 細 川 隆 司

發行者 西 谷 能 雄
東京・駒込・追分町

印刷者 中 内 佐 光
東京・千代田・飯田町

發行所 東京都文京區駒込追分町53

株式会社 未 來 社

電話小石川(92) 1778
振替・東京 87385

落丁・亂丁には責任を負います (曉印刷・佐山製本)

虎符

—信陵君と如姬—

(五幕)



人物

であるが、信陵君に師として、また友

として厚遇さる、七十歳。

信陵君

魏の安釐王の異母弟、名を無忌と

朱亥

魏都大梁の屠殺夫（狗殺し）。侯生の

いう。四十歳近い。

友にして、また信陵君から厚遇さる、

太妃

信陵君の母、六十歳。

四十歳。

平原君夫人

信陵君の姉。趙の平原君に嫁す。

侯女 侯生の娘、十九歳、太妃の侍女。

四十歳前後。

朱女 朱亥の娘、十七歳、太妃の侍女。

魏王

名は安釐王、五十歳前後。

ほかに、老婆甲、老婆乙、老爺甲、老爺乙、農

如姫

魏王の寵姫、二十五、六歳。

婦、乞食、青年、男僕、老年兵、壯年兵、少年

唐雎

信陵君の食客、九十餘歳。

兵おのの一人。醉拂いの屠殺夫二人、宮女四

侯生

本名は嬴、魏都大梁の夷門の門番

人、趙の女兵四人。及び衛士、群集。

時代

魏安釐王の二十年（西紀前二五七年）

場所

魏都の大梁（いまの河南省開封）

第一幕

舞臺は、信陵君の邸の庭園。右手舞臺奥に母の太妃の住む別館が左半分だけ見える。その構造は日本建築に似ている。室の右面には眞紅の幔幕がたれ、それには龍がぬいとりしてありその奥に内室のあることを示す。左面と前面にはそれぞれ三枚の淡黄色の簾をかけ、それには花模様を描かれ、また朱色のふちどりがしてある。簾は前面は捲かれ左面は垂れている。室の後壁には二つの大きな廚子が造りつけになっている。右の廚子には昭王（魏の先王）の畫像がかけられ、その前の銅壺には桂の花がさしてある。左の廚子の左下半分は戸棚になつており、戸棚の上には青銅器や玉器がならべられ、戸棚の中には座ぶとんがしまつてある。⁽¹⁾二つの廚子の間には琴をかける柱があり、その上には七弦琴が一つかけられている。室には席（しきもの）があるが、どの席も朱錦を以てふちどりしてある。室の外側は廻廊で透し彫りの欄杆がついている、欄杆は黄色、柱は朱色である。前面と左面の中央にはそれぞれ石の階段がある。

園中には花木を適當にあしらう、ただ秋の季節感を出すこと。その中に一かかえもある桂の木が一本あり、花が満開である。その左手には、低い垣根があり、舞臺の前面に近く園門がついている。

侍女二人（侯女と朱女）が前面の廻廊で投壺をやつてゐる。この遊戯は二人が兩端に坐してそれぞれ五本の箭（古人はこれを『算』と呼んだ）を持つ。一人は紅い箭、もう一人は緑の箭である。箭の尖端は危険を防ぐために鍔の代りに鉛の球がつけてある。二人の間には、下半部は動物の形をなし、上半部は壺となつてゐる青銅器（古人はこれを『中』と呼んだ）が置かれてゐる。二人は等距離からこの青銅器へ箭を投げ入れる。うまく入つた箭の数によつて勝敗がきまるのである。たとえば五本がすべて入れば「公爵」、四本なら「侯爵」、三本なら「伯爵」、二本なら「子爵」、一本なら「男爵」、一本も入らなかつたら、「罪人」となつて罰を受ける。負けた者は負けた数だけ相手に叩頭（おじぎ）をする。「罪人」となつた場合には、叩頭をするほかにひたいの上に炭を塗られる、いれずみの意味である。投げる場合は端座すべきで、身體をまげたりするのは違法である。幕があいたときには、壺にはすでに五本の紅い箭が入つてゐる。これは朱女が投げ入れたものである。侯女はまだ緑の箭を五本持つて右側に坐つてゐる。

朱女

（掌を拍つて歡聲をあげ）、そら、わたし公爵に昇格したわ。すばらしいでしょう。

侯女

（やはり掌を拍つて）まあほんとに。

朱女

規則を忘れないようにね。五本なら公爵、四本なら侯爵、三本なら伯爵、二本なら子爵、

一本なら男爵。まけた方は、まけた数だけおじぎすること。一本も入らなかつたら罪人として、

おじぎした上に刺青いれずみされること。

侯 女 あなたよりもよくおぼえていてよ。

朱 女 (起ちあがつて箭を壺からとり、もとの位置にかえる)、さあ、今度はあなたの番ね。

侯 女 (姿勢を正して) ええ、私も公爵になつてみせるわ。(注意ぶかく投げる。一本乃至四本が入るようにする)

朱 女 ほら、あなたの負け、おじぎをなさい。

侯 女 こんな遊戯でおじぎなどする必要ないわ。

朱 女 いいえ規則の數だけおじぎしなくちやいけないわ。

侯 女 仕方がない。それではおじぎするわ。(規則通りの數だけ叩頭する)

朱 女 (いばつてそれを受け) よろしい。——今度は負けた方が先にお投げなさい。

侯 女 (箭を拾つてもとの位置に歸り姿勢を正して投げようとする) さあ、今度はきつと勝つておめにかけるわ。

朱 女 (すこぶる自慢げに) もしあなたが勝つたら、倍の數だけおじぎしてあげましょう。

侯 女 そんなこと言つて、あとでくやむんじゃない?

朱 女 くやみなんかするものですか! きつと倍にしてあげる。その代り、あなたが負けたら、やはり倍にするの。よくつて?

侯 女 そら、もうくやんでるのね。私がどうして倍にしなければならぬのかしら。

朱女 あなたに自信があるなら倍にしたつていいでしょう？

侯女 結構よ、あなたが二度も續けて勝つことなんてないから。きつとあなたのその高い鼻をへし折つてあげる。

朱女 お手なみ拜見。

侯女 よく見ていらつしやい。（投げる、一本乃至四本入るようにする、五本は入れない方がよい）さあ、今度はあなたの番。（箭を拾つてもとの位置にかえる）

朱女 今度もきつと勝つわ、あなたなんかに負ける筈がないもの。（大いばりで投げる、しかしみな壺の前後左右に落ちて、一本も入らない）

侯女 （掌を拍つて喜び）ほら、あなたが負けたのよ、しかも罪人でおじぎのほかに刺青もよ。
朱女 いやあよ。（箭を捨て庭園に下りて逃げる）

侯女 （炭を手につつてこれを逐う）ずるい人、あなたは。ぜひとも懲罰してあげる。（二人、の園の中を笑いながら逐いつ逐われつする）

太妃が如姫と一緒に園門から登場。太妃が先、如姫が後。太妃はおだやかな人柄、如姫は美貌で、しかも落着きがある。）

太妃 何を騒いでいるの、ふたりで。

侯女 （太妃の聲を聞いて騒ぐのをやめかしこまる）

侯女 私たち「投壺」をいたしました。はじめ私が負けましたので、私は朱さんにおじぎをしま

した。その次には朱さんが負けたのでございますが、朱さんはずるくつて、おじぎもしなければ、罰を受けようもしないのでございます。

太妃 阿朱（朱女と呼び名）、おまえはいつも強情こつじやうなんだね。しかし阿侯（侯女と呼び名）、おま

えも、大目に見てやりなさい、あの子は齡も若いんだから。——二人とも私の言うことをお聞き。

阿朱、おまえはそれを片づけて（廻廊の投壺の道具を指す）、それから私の内室をよくお掃除し
ておくれ。

朱女 はい。（壺と箭を拾つて左の厨子の右側におく、それから右側の幔幕から内室へ退場）

太妃 阿侯、おまえは表へ出て、もし信陵君が歸つて來たら、私が待つてゐるからすぐ此處へ來
るように言つておくれ。

侯女 かしこまりました。（園門から退場）

太妃 （如姫に向い）上へあがりますよう。

如姫 お庭に居りました方が氣持がよろしうございます。

太妃 それではお庭にしましょうか。私はあの桂の花が好きなのです。（左手の桂樹を指し）あ
の下に坐りましょう。

如姫 ええ、今年は桂がほんとに綺麗に咲きましたわね。（二人、樹の下の方の石の上に腰かける）

太妃 （嘆息、獨り言のように）無忌ムキは王様とお話しているようですが、どんな様子なのでしょう

よう。

如

姫 私が参りましたときにはおふたりでとてもはげしく論争なさつていらつしやいました。須

價と段干崇の一派は趙に援軍を出してはいけないと主張しました。中には秦國に向つて屬國の禮をとり、秦王を西方の皇帝として拜したがよいというものさえあります。どうも多くのものが王様のお氣に入ろうとして、信陵君に反對している様子でございます。信陵君に賛成する人たちは壓迫されて發言できないありさまでございます。この論争は、どうやら悪い結果を生みそうな氣が致してなりません。もう何カ月も續いているのでございますもの。

太

姫 趙國からは援軍を求める使が最近とくに頻繁になつたようですね。

如

姫 そうでございますわ。ほとんど一日か二日おきに使者が参ります。眉毛に火のついたように。

太

姫 趙の都の邯鄲が秦軍にかこまれてもう一年半にもなります。平原君に嫁いだ私の娘からせ

んだつて手紙が來ましたが、城内の生活はほんとにみじめなようです。昔の人の言つた「子を交換して食ひ、人骨を折つて薪とする」ほどに至つてゐるようです。それで娘たちも兵隊と一緒になつて、晝も夜も代る代る城を守つてゐるそうです。そしてそのあいまには兵隊の服を縫つたりして。娘の手紙には書いてありました——『私たちの士氣は盛んです、しかしどんなに士氣が盛んでも限度というものがあります、このままでは守りぬくことはできそうもありません。』……

如

姫 ほんとに心配でございますわ。敵の秦國がまたあんな、猛獸よりもつと性の悪い國でござ

いますから。

太 妃 （頭をふつて嘆息する）ほんとに聞いただけでもぞつとします。一ぺんに數十萬の人間を殺してしまうんですからね。四年前の長平の會戰^③では、秦は降参した趙の兵隊四十五萬を生き埋めにしたといひます。全く何という慘酷さでしょう。

如 姬 人の恐れる洪水や猛獸よりもつと殘忍でございすわ。あの會戰では趙の兵隊がたくさん生き埋めにされたばかりでなく、勝つた秦軍の方も半分以上戰死したそうでございす。それで秦國では十五歳以上の男子を全部徴發したそうでございす。しかもその徴兵をするために秦王が自分で出かけたという話でございす。

太 妃 いったい何のためにそんな戰爭をするのでしよう。殺されるのは人間、殺すのも人間。殺されるものには親や妻子がある、殺すものにも親や妻子がある。どうして相手の氣持を察することができないのでしよう。

如 姬 根本は、人間を人間として待遇することを知らないからですわ。人間を人間として待遇するやうな時代が來たら、なんて幸福でございましょう。

太 妃 私はほんとに心配です。邯鄲がもし陷落したら、おそらく數十萬の人間が、老人や女子供までが、みなごろしにされるでしよう。

如 姬 それは免れがたい運命でしよう。だからこそ趙國の人たちは邯鄲城を死守しようとしているのですわ。たとえ「子を交換して食う」というほどにまで及んでも降参しないで頑張っている

のでございますわ。

太 妃　ここ三十年の間に私たちの大梁も二回ほど同じ目にあいそうになりました。しかし二回とも領土を割譲して和を求めることによって救われました。すると、和を求めるのも一つの方法かも知れないけれど。

如 姬　ただ秦國のような慾深な國は満足することを知りません。領土を割譲して和を求めれば、そのとき一時は苦痛をまぬかれるでしょう。しかし、ほつと一息つくひまもなく秦軍はまたやって來ます。秦という國は關東の六國をすつかり併吞するまでは、満足致しません。

太 妃　無忌もつねに同じことを申しております。——ここ數十年、私たちの魏國はまあいい方でした。秦國と二回ほど交戦するにはしましたが、大した戰禍も蒙らず、他の五國も私たちの國を犯そうとはしませんでした。まあまあ太平の日が続いたと言つてもよいでしょう。

如 姬　みんな信陵君のお力ですわ。

太 妃　そうでもありますまいが。

如 姬　道理のわかる人はみんなそう申しますわ。信陵君は賢人を厚く待遇するので、天下の賢人はほとんどわが國へ集つてゐるつて。それからこうも申しますわ、齊の孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君、と天下に名高い四公子のうちでも、わが信陵君が第一人者だつて。

太 妃　（さすがに喜びを顔に現わして、）そういう話は私もときどき耳にしますけれど、母親の眼から見れば、わが子がどんなに有名になつても、やつぱり赤ん坊と同じですよ。

如 姫 それが太妃さまの謙讓の美德でございますわ。そういうお心がけでいらつしやるからこ

そ、平原君夫人とか、信陵君とかいう立派なお子様をお育てになることができましたのですわ。

太 妃 まあ、あなたまでがお世辭を仰言るの。

如 姫 世間ではこう申しておりますわ、大梁の市民の流行語を御存じありません？——『母となるなら信陵君の母に、妻をめとるなら平原君の妻を、子どもを持つなら殿下のような子を』つて
いうのを。

太 妃 世間の言葉というものは半分はお世辭ですからね。私に言わせるなら息子の無忌には少し
不審の點があるのです。

如 姫 どういうことですか。

太 妃 あなたのおつしやるようにあの子が立派な人間でしたなら、どうして兄にあたる王様のお
氣に召さないのでしょう。

如 姫 （嘆息して）それは信陵君の責任ではございません。その理由は私にはつきりわかつて
いますわ。信陵君がごりつばな人物だからこそ王様のお氣に入らないのですわ。

太 妃 何ですつて？

如 姫 王様はあの方がこわいのです。太妃さま、あなたは御存じないでしょうけれど、王様はこ
んなお話を私になさつたことがあります。——ある日信陵君と王様が碁をなさつていらつしや
つたとき、『趙の軍隊がわが國へ攻め入ろうとしています。國境ではすでに警戒ののろしがあげ

られました』という急報がありました。それで王様は碁石を投げて、いそぎ大臣たちを集めて對策を講じようとなさいました。しかし信陵君がこれをおとめになつて『おさわぎになるには及びません、趙王は獵をしているのです。わが國へ攻め込んでなど参りません』と申されました。王様は信陵君の言葉に従いはしたものの、内心は心配で碁を續けることができませんでした。すると、まもなく再び北方から急使があつて、『趙王は獵をしているので、わが國へ攻めてくるのでありませんでした』と報せました。このことは王様を大變驚かせました。『どうして、おまえにはわかつていたのか』とたずねると、『私の食客の一人が趙王の日常をさぐつており、どんなことでもあらかじめ私に報せてくるからです』と信陵君はお答えになりました。このことがあつてからのち、王様は特に信陵君をこわがるようになりました。王様は一回ならず、私に申されました、『無忌という奴はこわい奴だよ。あいつの力倆は朕より上だ。人心を收攬する術を心得ている、國內の人望をあつめているばかりでなく關東六國のすべての人望をあつめている』つて。こんな風に信陵君をこわがつているからこそ、ここ數年來信陵君の意見を納れず、これを遠ざけようとなさつてゐるのです。

太 妃 兄弟の間がそんな風になるとは困つたものです。私にいわせると、弟の方が悪い。弟が弟としての道を盡さないからこそ兄の方でも信用しなくなるのです。

如 姬 昔から父子の間でさえ、融合しない例がたくさんあります、まして兄弟の間柄はなかなかむずかしいものです。子が父に孝道を盡したとて必ずしも父の氣に入るとは限りません、弟が弟

の道を盡したとて必ずしも兄の氣に入るとは限りません。太妃さま、あなたですから正直に申し上げますが、王様のようなあんなかたは、私でさえ大嫌いです。

太妃 (大いに驚いて) まあ、何ということ。王様はたいへんあなたをお氣に入りだということはありませんか。

如姫 王様が私をお好きなのは私も存じております。しかし、王様は私を一個の人間として愛しているわけではありません。私を一個の物品として愛しているのです。まるで狗や馬を可愛がるように可愛がるだけです。黄河の鯉を食べるのが好きなのと同じ意味で好きだけです。しかも私が好きなのは、私が齡が若く、顔もそんなに醜くないからです。もし私が年とつて醜くなつたら、私を好く筈はありません。王様は私の前にも別な若い美人を可愛がつたことがあります、その人たちは、破れ草鞋と同じように次々と捨てさられたではありませんか。ほんとに、私は王様の草鞋にすぎないのです。まだそれほどボロになつていない草鞋です。王様は毎日私のことを「可愛い兒」だの「べつびんさん」だのと言っていますが、そんな言葉を聞くと、私は胸がわるくなります。

太妃 でも王様はあなたの言葉をよく聽かれるようじやありませんの。

符如姫 日常茶飯の、どうでもよいことだけです。少しでも重要な問題になるとすぐに、『女どもの知つたことではない、牝雞^{ヒナトリ}鳴を告ぐるは家の患なり、と昔から言うではないか』とくるんです。ほんとに不愉快でございますわ。

太妃 今まであなたはどんなことを申しあげて王様に叱られましたの。

如姫 たとえば——、平原君夫人が軍隊の中へ入つて働いているということを聞いたものですか、私たちの國でもそうしたいと思ひ、私やほかの女官たちと一緒に軍隊の中で働かせて欲しい、そうすれば士氣を鼓舞して、外患を防ぐことができるだろうとお願い申しました。すると王様は『女こどもの知つたことではない、女兵を必要とするほど我が國はまだ亡國の運命に至つていない』とお怒りになりました。

太妃 (微笑して) そうですか、女が兵隊になるなんてことは珍らしいことですからね。

如姫 それから趙に援軍を派遣する問題についても、私は『晉鄙將軍に兵を率いて邯鄲を救うように命令を出して下さい、趙は我が國と兄弟の國です、趙が亡びたなら、秦は必ずわが國を滅ぼしにやつて來ます、私たちは唇やぶれて齒さむしという古諺^{ことわざ}を忘れてはなりません』と申しました。すると王様は大變お怒りになつて『おまえたち女に何がわかる、おまえは無忌の奴と全く同じことを言う、それほどなら、無忌の妻君になつたらよいだろう、無忌は獨身だから——と、こうなんです。私の方も不愉快ですから、しばらく知らんふりをしていると、まもなく『可愛い子、べつびんさん』とくるんです。王様は私を全く玩具扱いしているんです、私は王様が大嫌いです。

太妃 (相手を慰めて) そんなお話、はじめてお聞きしましたわ。でも、そんな氣持は胸の底からすつかりなくしておしまいなさい、でないとあなたにとつて不幸なことがおこるでしょう。私

も若いときには似たような氣持を抱いたこともあります。私はそれをすっかり捨てました。それは、年齢と地位に關係があるのではないかしら。私もあなたと同じように王様との年齢が離れていました、多くの妃たちの間で輕視されて來ました。しかし、自分の心に顧みて恥じるころがなければかまいません。まして、私たちの天職は子どもを育てることです。それは辛いことです。しかし、とても幸福なことです。ある時には、私たちの希望のすべては、ほとんどこのもの上にかけられます。成人に對してはどうすることもできないが、自分の子どもに教養を授け、子どもが鳳凰となるか雞となるか、龍となるか蛇となるかは、私たちの力にかかるといつてもよい位です。よい子どもに恵まれれば、自分の地位も高くなります。『子は母を以て貴く、母は子を以て貴し』という言葉はお聞きでしょう。

如

姫 聞いております、父が丈夫な時分よく聞かされました。でも私、太妃さまとは比較になりませんわ、あなたはこの世の中で最もよいお母さんで、私たち女性の模範ですもの。

太

妃 そんなに謙遜なさらないでも……

如

姫 いいえ、謙遜ではありませんわ。私は自分をよく知っています。私は忍耐心が餘り強くなく、その上、そう勇敢でもありません。正直に申しますと、太妃さま、私は自殺したくなることがたびたびあります。

太

妃 それはいけません。

如

姫 でも私は自殺するだけの度胸がないのです。私はいつも考えています——あんな王様の子